



松島藩定通編



流 珠 板 五 玉 題

東部士林 幸中堂板

叙



宝浦子珠を得るに交諸誠のそくひんを以て
物あつて用ゆの時を珠と称し廢れし時を
爲名にひきしるは珠を得ると思ふも
此宝浦の地理を志し其れを官一守人を
以て後其所に至る交子我子等郡志に
其風俗子遊し志も諸極志師の教を傳
言言中而世実自在の思世に於て

師爲友を兼れ給ひて其理二千秋の如きは
 時あかき其縁にあらざらんて其名をたらし
 故也の新子は時子たるがかりて絶絶の二字を
 給ひても今も記念や其人ありて續て今
 師宗其方獨を字とて誘掖のためやう形あり
 然るも又字ありて一曰暱也給ひて其書中
 上る一少冊を想ふて与ふ是れならん給ひ
 之縁の世り一十哲を給ひて一門徒之子の

詩もあまた給ひて其書中固く是れを四序の
 類を又百に思はれり此を其書中絶へ給ひ
 之のへ様子を白する人の名も、琥珀琉璃の
 珠も得つて一詞宗年以是を棒子たるを
 懐玉とあてて何處にらん其書中も此の時
 とあはれに彼る其書中も其書中も其書中も
 然り頻りに推轂をむるも其書中も其書中も
 其人も其書中も其書中も其書中も其書中も

ケ薩摩一すくさ夜江都ノ文を三死ノ其の病
を乞に波歌家の跡ノ等も得て治平を水干を
彫工も成るるに為しぬ其の類類あるん
るも和成随後の珠の飾りもさうぬく古人
其の歌の集とありぬ其の類するありきを
抄に記するも志するの志なり

直徳の田山と臆旭の巻巻



凡例

- 古人の書を其書しの類縁うくても書きたりぬ
極下の類歌形もその六不分歌の上系より一系中類歌を
之にたす者神學子の書歌を得たりては書歌一
かゝるをたすて其のよま歌の文やせんといかりぬ
俗のえん字かゝるをよまては書歌の類に類を
諸集情勢の字に鑑もよまぬありぬ其の二十年
の林下に遊み詠をいつきありぬ
- 其のたあするも風流第一の書物ありぬ

あゝ聖業の古例にあつて其業の妙を抄く

○はらふ遊ふ古人あつていふも元録事申の事い

をのて素をす其代をも解きいふもあつて以録

測海のたつとを思ひ減く体もまゝなりけり

乃ち又大槻を案す

○蕙所子古人那とていふも花さるるをさるる事

掌教を圃其以より連絡して宗周及びいふ勢

鬼つゝ事ある世にいふも持ある事あり

○祖師の事いふも時代を替はかしていふ事あり

もあつて其師を句端なり

○喜林俊とて守墨俊義柳舎く其義を國京條の

流り形より解前と其の妙をいふも句端なり

○本末申すは神の秘をいふも混合を言ふも曲なり

又古人既述して古人の分者といふも又所の二師なり

○是れをいふも聖子の其元業を其の言を案す

あつて其心く其心にいふも其の事いふもあり

○歌子重ては徳を案にけり其増山井を案して案

其案なりとて其行子徳をいふも其を補ひ歌子二

刀ありといふも其ありといふも其案を案して案

後ありといふも其ありといふも其案を案して案

○まゝして田舎子の歌子能源とつる部も不分級のまゝも前卷に
つゝらるるありき人様かゝるまをがし

○まゝの子のおしゝり人の困所得あるまゝ入元來諸集歌世の甲
より得るまゝありき其まゝに益ありて所より申すは
字を整へてん押して志人とせし法業法獵水一強く

○年事申其意不詳とあるまゝ書せんとし人の歌子も
まゝに諸集まゝありきまゝありきまゝありき補ひて
の終し集申なむいまをまゝ七文字書し之はありの終り
雲のこしと申すなり其まゝありきまゝありき
あゝの再案の例ありき

○其まゝの源のまゝ子の子まゝにたゝ水一なる歌集の大切
なまゝのまゝなり毫釐子まゝの意をわきまゝとせし
にまゝのまゝなり鳥馬のまゝありきまゝありき
此も老妻のまゝなり其まゝなり其まゝなり

○日門のまゝに社申莫逆のまゝなり其まゝなり其まゝなり
勿加しをまゝありき加ふたれまゝなり其まゝなり

○いゝまゝのまゝなり其まゝなり其まゝなり其まゝなり
此より法業もまゝなり其まゝなり其まゝなり
其まゝなり其まゝなり其まゝなり其まゝなり
のまゝのまゝなり其まゝなり其まゝなり其まゝなり

採歌の常安の意歌工安の一脚とす

○五歌とくはしるものゆき目に加へる百余歌

あつと目錄子丁付ある其歌を早く志見

子長歌の下をえ合せて何丁目と引合え

松露菘人

丁未歳
白翠



古人五百歌 春之部目錄

山車	初丁	櫻	二	糸山	三	神櫻	四
先見	四	神宮	五	まつ日	五	神鶯	五
神くさ	五	まつ鳥	五	神東風	五	神一階	五
まつ夢	六	春山	六	今朝の春	六	花の房	六
江戸の雲	七	後千	七	門松	七	大あく	七
はるめ	七	居る	七	雑考	十	大は	八
喰つ	八	蓬菜	八	忌餅	八	まき	八

年玉	八	茶山草	八	冬羽子	九	うね祝	九
恙乃	九						

植物之部

子の目	九	小和川	九	七種	九	草	十
恙蒙	十	芹	十一	梅	十一	柳	十一
聖考	十三	下藤	十三	恙草	十三	津久玉	十四
卯梅	十四	木の寄	十四	草の葉	十五	うね	十五
種屋下	十五	五加木	十五	すゝ木	十五	鱧草	十六
古ぬく	十六	安子木	十六	木瓜	十六	恙草	十六
接木	十六	うね	十七	葉の目	十七		十七
種おろし	十七	梅	十八	海棠	十八	連翹	十八
利木の目	十八	李子	十九	辛夷	十九	木蓮花	十九

小麦	十九	苗代	十九	豆歌	二十	胡葱	二十
菘	二十	山吹	二十	法	二十一		

生類之部

鶯	二十一	猫の意	二十一	白兔	二十一	冬の葉	二十三
雀子	二十三	春鷹	二十三	雉子	二十四	雲雀	二十四
帰鳥	二十五	乙鳥	二十五	駒鳥	二十六	鰻	二十六
春鶯	二十六	蝶	二十六	云虫	二十七	柳	二十七
親	二十七	蛙	二十七	田螺	二十八	蚕	二十八
若鮎	二十八	うね	二十八	うね	二十八		
時後之部							
七保眼	二十九	世々	二十九	起す	二十九	赤生	二十九
たま長	二十九	綱川	二十九	雲	三十	おろし	三十

風中	三十一	数入	三十一	雉	三十一	河	三十一
あつら	三十二	焼	三十二	雪	三十二	残雪	三十二
東風	三十二	春風	三十二	雪解	三十二	春風	三十三
春の雪	三十三	春の雪	三十三	春の夜	三十四	春の夜	三十四
春の雪	三十四	春の雪	三十四	春の雪	三十四	春の雪	三十四
海苔	三十五	海雲	三十五	雪合	三十五	雪合	三十五
陽あ	三十五	糸通	三十五	二日灸	三十六	神午	三十六
彼岸	三十六	高忌	三十六	涅槃	三十六	西行忌	三十七
長き日	三十七	木代	三十七	餅	三十八	餅合	三十八
夕午	三十八	曲	三十八	長軍	三十九	烟打	三十九
つら	三十九	峯入	三十九	初春	三十九	春餅	四十

都而百五十二題

古入五百歌 夏之部目録

あつら	三	雨	三	考	三	雪	三
よ	三	紫	三	羽	三	物	四
多	四	連	四	水	四	螢	五
子	五	羽	五	了	六	曇	六
子	六	虫	六	攪	六	経	六
致	七	致	七	致	七	燭	七
解	八	夏	八	麻	八		

生る心乃部

種々の花	五	心づく	五九	志西の花	五九	柿の花	三十
白ひら	三	蕙子花	三	牡丹	三	芍薬	三十一
あはれ	三	苔の花	三	けい	三	薔薇	三十二
竹の子	三三	菖	三三	茄子	三二	あうぎ	三十二
おのれ	三三	夏草	三三	櫻子	三三	石合	三十二
きんぎょ	三三	豆虫	三三	江戸の草	三四	櫻餅	三十四
夕歌	三五	葉の草	三五	あやめ	三五	薄の花	三十五
うねり	三六	何草	三六	草葉	三六	蓮	三十六
ほろ	三七	柳のさう	三七	かたき	三七	忍竹	三十七
ア見こ	三七	夏納縁	三八				
都而白の中歌							

古人五言題出の集

春之部

南總鹽旭菴龜足行取恵瓜州 校合

花咲て七は影えらる林下う船
 志はくぬき花のうあうはねか
 一借となくくありくあ見んは
 薄く中へんきさうは花の林うな
 花さうて浮世上風を那ううう
 花うんくさくまて吹き海の泡
 何事をも花名る人の長 刀
 啄木うの枝木はうう花の中
 芭蕉翁
 季吟
 伝徳
 重執
 穴雪
 去来
 犬草

花

春女との儀 走りゆく花の影
 羽 乱れをたぐり地をまねて村りゆく
 岸の雲すこしを花もまねて
 花守もかきまねをばきありせ
 去年の書もまねて花をまね
 花まねもあつて花守もまね
 花守もあつて花の人もまね
 あつて人のつらまねるつらまね
 つらまねるつらまねるつらまね
 かつおるもつらまねるつらまね
 一本をまねるつらまねるつらまね
 花の聖世をまねるつらまね

許六
 正秀
 聖秀
 秀山
 智成
 本壽
 聖成
 史報
 松風
 信成
 信成
 卯七

咲りゆく花の影 走りゆく花の影
 花守もかきまねをばきありせ
 去年の書もまねて花をまね
 花まねもあつて花守もまね
 花守もあつて花の人もまね
 あつて人のつらまねるつらまね
 つらまねるつらまねるつらまね
 かつおるもつらまねるつらまね
 一本をまねるつらまねるつらまね
 花の聖世をまねるつらまね

鬼契
 暁翠
 友五
 凡北
 仙化
 冰花
 松風
 梅壑
 凡北
 尚白
 鐵人
 石星

標

夜入るて物川させりたのちや
酔あふりて下橋より花のふ
隠家より初花多き花子母事
もてあまう花のふ初花泣く

聖名
多輝
花明
印明

木のきやまけり橋も橋より那
唯しやまきから定めぬ山かつら
名のつらぬ所つらぬしや花の橋
花先よりえし花あふちる橋
まぬらぬ花部より牛の白ひら

高
其角
花春
大草
酒堂

いそ折て人ゆらんまの山さくら
又のふえ空し日暮の山はく
昔理より少難きあきさう山橋
あまらぬさきさうのまきさくら
山さくら花をたしそ花もあ
花橋を花地のちる橋し
あまらぬ(花のさめさる方さら
花さくら花橋よりあまらぬ
山橋世より母よりし文梅子母
あまらぬ船と花の橋あまらぬ
山さくら花つらぬのちあまら
花さくら花の橋あまらぬ

一洗
珠山
公承
咲山
尚白
木因
自槐
山川
精帷
花風
花風
花風

表の二

糸様

山さくらさくら川のあり車
是くくく命押られ様
か入を人の背かし山さくら
はふ子かきりかおるも山様
と氣をゆるるまはしとく山様
一はくく鳥のさあす様
のれれさく様のさくくさく

糸さくらさくら川のあり車
はふ子かきりかおるも山様
と氣をゆるるまはしとく山様
一はくく鳥のさあす様
のれれさく様のさくくさく

春三

糸様

山様

山様

山様

山様

山様

山様

山様

初様

笑さくらさくら川の中よりさくら様
乃さくらさくら川の中よりさくら様
安さくらさくら川の中よりさくら様
たさくらさくら川の中よりさくら様
めさくらさくら川の中よりさくら様
ささくらさくら川の中よりさくら様
おさくらさくら川の中よりさくら様

乃さくらさくら川の中よりさくら様
安さくらさくら川の中よりさくら様
たさくらさくら川の中よりさくら様
めさくらさくら川の中よりさくら様
ささくらさくら川の中よりさくら様
おさくらさくら川の中よりさくら様

遅様

乙那
千那
和及
一笑
鬼費
利聖
其角
涼菴
史邦

おしんをいよつとて様うい
はさるの申は由緒しつおる様
残居申おしよはさるら

立花
山川
紫雲

元日

えん子回毎のれを思し
えん子岩重十乃格思し
えん子啼ては聲のそのおと
えん子おとあつた方えん
えん子神代のるれおと
えん子何子多くとむおと
えん子はれを望川のその
えん子懸垂の後のるより

最
其角
岩香
吉来
守武
忠知
赤山
石所

初空

まつをわめくすと喜ぶる子の
初空らや出美山のその春
たは空を初空の置所

嵐雪
友新
夕輝

まつ日

おれ名也大いそをの初日
梅う雪の節まよる初日
その戸に初日をありしと
まつ日を正家まもつと

任口
交考
乙由
利牛

初新

初新や夜う日次の早の思
まつ新や味ゆく旅の花を

兼輔
可風

初春

我々の松ははりさき初春
北極星の星の形をうらなう
芝浦の車の上は初春

西崎
斜嶺
初波

春五

春五とて鳥の春
春のうらなう初春

野坡
春五

初春

初春風は四海は春
春の春風は春の春

宗鑑
春五

初春

一年も春に春
春の春に春

宗鑑
乙由

初春

春の春は春の春
春の春は春の春

春五
今徳
安室

春五

春五とて春の春
春の春は春の春

春五
今徳
安室

春五
春五

春五とて春の春
春の春は春の春

春五
今徳
安室

春の

早も木もめでさきくしりたのま
船夕の人もめつじりきさ乃春
西垂にふちれうては船のけり
紺鴨簾すれさらく明り春

貞徳
宗因
休甫
石明

美
はろ

待人を燕着ておさき花の香
めんくの物をさくしやあけのけり
花のはる降子ゆきあけまじ
むの春連哥公古さくは
花ちまき抄りしは世さけれり
投入た下まも面かー花の香

菊
嵐雪
少竹
文謙
釣雪
柳花

江戸
の春

種ひつる賣お只那ー江戸の春
陰ひつる種お梅あー江戸のま
海辺ー軸ひのあまに江戸のけり

其角
作者
多碎

福
喜
料

福喜草当らめさる根也ー
懇のある花の色をわぬき多
めんきむさる花を福喜草

吟風
扇雪
危世

門
松

よらち名日本あつて門の松
たかきとて伴勢り中家笑人さ
おまの居る志事ー門の松

徳元
其角
吉来

大ぬえ

大ぬえとて吉野のさくら子の白ひし
大ぬえとて年々とて形なる遊ひし
松の根の癖よなる朝あつち

防川
松丸
尚白

はらけ

遠国子梅の花か舞ひし
たふらけ枝のたふらけ

如行
北枝

居穂

居穂さして小強歩む娘の子
いんぎとて居穂那とて人の子

立志
荷号

野煮

野煮もたれとて形く野煮
及礫の野煮とてたれ

山嵐
車庸

太箸

太箸も命をうけく太箸
太箸は命をうけく太箸

安藤
卯子

喰つ

喰つくと喰つとあつち喰つ
喰つと喰つと喰つと喰つ

山嵐
体丸
柳居

遊来

遊来に喰つと喰つと喰つ
遊来に喰つと喰つと喰つ

篇
山居
岩居
鬼受

若殿

若殿は略名の中へに推しよる
つらむらひゆ是のまゝに推しよる

巴新
和文

若幼

若幼は若くして結ばしむるの若き者
大津繪の字のちりまを何 併

字證
若

若玉

若玉は梅野りか雪の若くは
まゆやまの取からせ世のまゝ

言文
玉

若山

若山は若くは志まゝにせしむる
若山は志まゝにせしむる
若山は志まゝにせしむる

若山
若山

若羽子

若羽子は若くは若くは若くは
若くは若くは若くは若くは

若羽子
若羽子

水祝

水祝は若くは若くは若くは
若くは若くは若くは若くは

水祝
水祝

若久

若久は若くは若くは若くは
若くは若くは若くは若くは

若久
若久

若久は若くは若くは若くは

子の

子の道に都く教むなむり
ひより愛もよらぬ家か
事柄を大相好らふ子の

菖蒲
去来
柴草

小松

五ヶ月を植て種あてり
小松のまゆめ松葉の
君よりまゆめ松葉の

白尾
重松
字名

七種

七種や梅子まゆめの
那の山やゆめ松葉の
七種とや梅子まゆめの

湖春
其角
地城
柳岸

廿秋

廿秋のまゆめ松葉の
一ひきせんにて度つ
廿秋のまゆめ松葉の
活極や廿秋のまゆめ
廿秋のまゆめ松葉の
笑ひれて又も廿秋の
那の山やゆめ松葉の
廿秋のまゆめ松葉の
夕はの船も廿秋の
宵の舟も廿秋の

車庸
乙由
其角
嵐雪
猿轡
宗道
我岸
林也
孤屋
如行

菜

昔は蘇子りや多賣りのつる菜は
 白濁かすは巾着りりつる菜の
 菜はあつと菜との中もさん
 七名子つる菜つと菜すやるの
 以つるが甘さをあめるるを
 菜ると白濁してやあつるを
 菜の情やむの菜の菜菜加
 ると菜つる菜つと菜子徑の
 つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜那菜の菜つと菜つと菜
 情つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜

菊
 其年
 吉菜
 土旁
 楚之
 酒化
 曲琴
 伝扶
 路通
 杉風
 史部

芥

大内の節起りくつる菜は
 菜はあつと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜
 菜つと菜つと菜つと菜つと菜

起
 菜
 其角
 惟然
 菜
 丈
 和
 如
 山
 工

梅

梅を昔にのつて其の山は山流し
 山流しを山流しに梅のつた
 那つて又梅の山をわたりぬれば
 こゝろつて一梅りのあつては
 梅をくく香子梅の白ひび
 一ひびくく白梅を梅の梅招く
 横子梅を梅子つたあつてぬ
 ちり梅をわたりぬ梅の一をび
 梅のつては梅のつて梅のつた
 梅のつては梅のつて梅のつた
 梅のつては梅のつて梅のつた
 梅のつては梅のつて梅のつた

霜
 其角
 去未
 凡批
 尚白
 梳隣
 從古
 猶誰
 紫ト
 朱山

嵐を子梅をくく梅のつては
 大庭子すくく梅のつては
 梅のつては梅のつて梅のつた
 こゝろつてあつては梅のつた
 寺のあつては梅のつた
 こゝろつて梅のつては梅のつた
 向梅のつては梅のつた
 十八のあつては梅のつた
 こゝろつて梅のつては梅のつた
 梅のつては梅のつた
 梅のつては梅のつた
 梅のつては梅のつた
 梅のつては梅のつた

丹堂
 空白
 空白
 一梅
 李由
 急日
 子川
 乙中
 柳枝
 冬時
 寺明
 即明

柳

川のほとり空をよみぬる柳、この形
 余事には神りて人々を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に

舟
 本周
 寺来
 野坡
 翠瓦
 野々
 柳花
 浪花
 木児
 李由

春十二

川のほとり空をよみぬる柳、この形
 余事には神りて人々を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に
 志あるはと流るる志を柳に

小若
 侍言
 柳花
 乙空
 舟来
 春所
 寺来
 野坡

明苑

下苑

美州

山亭の附一き昔より野老の
守梅の遠くは世帯のやうな愛
たる年の盡くらんやう野老より
花の香を人より人へおぼえぬ
る昔の窟のあさる朝の下
下とえやうくの色の返もた

美州の和松まつ葉は休閑の道
つう州のやうなた結る相のや
美州の和松まつ葉は休閑の道
つう州のやうなた結る相のや
美州の和松まつ葉は休閑の道
つう州のやうなた結る相のや

其角

蓮谷

時若

角江

其角

柳花

太極

椿

美州の和松まつ葉は休閑の道
つう州のやうなた結る相のや
美州の和松まつ葉は休閑の道
つう州のやうなた結る相のや
美州の和松まつ葉は休閑の道
つう州のやうなた結る相のや

其角

曲梨

正秀

野郎

利牛

吉来

文考

洞木

桂士

柳若

号酸

字石

紅梅

木 の 芽

紅梅や白の雪をさすを 赤きまひ
かゝるふハ贈はるを 赤きまひ
紅梅の白あはして 後の赤きまひ
かゝるふハまきく 横さふまひ
紅梅の赤の赤く 赤きまひ
紅梅の赤もを 赤きまひ

赤んつてハハ 赤の赤きまひ
赤い赤の赤きまひ 赤の赤きまひ
赤い赤の赤きまひ 赤の赤きまひ
赤い赤の赤きまひ 赤の赤きまひ
赤い赤の赤きまひ 赤の赤きまひ
赤い赤の赤きまひ 赤の赤きまひ

赤平
杉風
紅梅
赤梅
赤梅
赤梅
赤梅
赤梅
赤梅

草の 芽

草の 芽

草の 芽

草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ

草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ

草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ
草の芽の赤きまひ 赤の赤きまひ

草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽

草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽

草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽
草の芽

五架

ちりちりく納法ひすふ五架事
そとやちりくくた子屋の急伝

峡名
扇堂

す

禮

山崎事く何中事すす
あつちりのおとり強子甚ちり
白鳥群の官方に志をすす
経子の屋のなさす
すすえりり白の山事地
地すうあらはな事
傾城の白鳥さん
好まき芝にあす
投あはし小田の舟す

菊
聖名
園也
秋色
舟名
草
涼菴
之道
石

朝

は

学んあちり事
朝の早のあちり
と世あちり事

圃泊
急米
石

ちのるる志事
ち務わ横事
り船も事
かちりり
はちりり

陸舟
雲宿
智文
釋名
支考

割

心事く事
事も利も事

菴
支考

木瓜

砂川舟をたぐりてゆく木瓜の石
木瓜の皮を食ふと味は酸なり
乃其に苦つて酸や油をのり
足の血を木瓜は引取りて赤腫

猿 狸
且 郎
梅 豆
山 川

蕙角

言治の昔は角めくつてきり形
川渡舟流を舟をもちて蕙の角
大さき拍子あそびありて木瓜
はくさくといふ人のぬきかたつて
ちし柳をもちて舟をもちて
中世頃をもちてあるて木瓜
梅の木の葉をもちてはくさく

尚 介
猿 陸
嵐 重
一 笑
靴 不
雪 久

檜木

山雲の影もあがりて檜木
舟の影を檜木の葉にうつりて
うすしの葉をもちて舟の道
うすしの葉をもちて舟の道

其 角
杉 風
一 桐
舟 山
舟 山

鴉

葉

山雲の影もあがりて鴉の葉
山雲の影もあがりて鴉の葉
山雲の影もあがりて鴉の葉
山雲の影もあがりて鴉の葉
山雲の影もあがりて鴉の葉

出 芳
仙 化
水 石
重 五
舟 土
舟 白

茶

茶の茶の字に味あり部
おたはちわんてんうやうてん
茶の茶の字に味あり部
茶の茶の字に味あり部
茶の茶の字に味あり部
茶の茶の字に味あり部

其年
史部
貴重
極其
其年

種

種抄り一徳子
出らまつて種
種抄り一徳子
種抄り一徳子
種抄り一徳子
種抄り一徳子

其年
無不
尚公
其年

桃

桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部
桃の桃の字に味あり部

其年
北斐
孤至
如流
本因
桃隣
利生
氣彈
乙生
柳花
其年
其年

海棠

海棠花の咲く時
花の紅くも
花の白くも
花の紫くも
花の黄くも
花の青くも
花の赤くも
花の黒くも
花の白くも
花の赤くも

重核
酒香
てん
赤周
尚白

連翹

連翹花の咲く時
花の紅くも
花の白くも
花の紫くも
花の黄くも
花の青くも
花の赤くも
花の黒くも
花の白くも
花の赤くも

湖春
極及

梨の花

梨の花の咲く時
花の白くも
花の赤くも
花の紫くも
花の黄くも
花の青くも
花の赤くも
花の黒くも
花の白くも
花の赤くも

玄考
若伴
尚白

李子

李子の花の咲く時
花の白くも
花の赤くも
花の紫くも
花の黄くも
花の青くも
花の赤くも
花の黒くも
花の白くも
花の赤くも

尚白
一連雪

辛夷

辛夷の花の咲く時
花の白くも
花の赤くも
花の紫くも
花の黄くも
花の青くも
花の赤くも
花の黒くも
花の白くも
花の赤くも

尚白
巴冬
遠雪

木蓮

木蓮の花の咲く時
花の白くも
花の赤くも
花の紫くも
花の黄くも
花の青くも
花の赤くも
花の黒くも
花の白くも
花の赤くも

多那
尚白

海棠

海棠の花の咲く時
花の白くも
花の赤くも
花の紫くも
花の黄くも
花の青くも
花の赤くも
花の黒くも
花の白くも
花の赤くも

仙代
若伴
春冬

苗代

苗代きえつおる森のかすくろ
那ハくろたれ一息中那く
苗志孫の素寺の塔のなから
名澤と親のめまき 苗代田
ありくろんそらぬのすくろ
苗代や仁王の御く那定の徳
那ハくろ子世母たりまらぬ
泥る龜やありくろ子味つき
猿の白鼻に苗代まや心あ
苗代や支のありに折松を
那ハくろ丹摩くろすき
は田志孫や素寺の塔のなから

支考 許云 朱迪 支考 子英 而得 史邦 尚印 孫所 折松 名孫

世殿

狗尖の若子ありあつてい
く西くや焼野にそむた世殿く
一尺のまきいのかや松のく
瑞きくろ道やまきいのかや

岩世 史邦 正務 沽純 石解

桐葉

桐葉の若子ありあつてい
まはくろもくろくろ道やまきい

史邦 岩世

夏

夏那くろそまきい
山那の若子ありあつてい
夏那の若子ありあつてい
夏那の若子ありあつてい

史邦 岩世 知十 史邦

山ぬた

山の平字はの橋の白く時
あはれしく山はあさう洋たき
山ぬたを久まひとせう忍申後
松の山ぬたを久まひとせう忍申後
山ぬたを久まひとせう忍申後
やうやくを起してあつら岩相う形
山ぬたを久まひとせう忍申後
やうやくを起してあつら岩相う形
山ぬたを久まひとせう忍申後
やうやくを起してあつら岩相う形

山ぬた
あはれ
忍申
後
松の
山ぬた
を久まひ
とせう
忍申
後
山ぬた
を久まひ
とせう
忍申
後
やうやく
を起して
あつら
岩相う
形
山ぬた
を久まひ
とせう
忍申
後
やうやく
を起して
あつら
岩相う
形
山ぬた
を久まひ
とせう
忍申
後
やうやく
を起して
あつら
岩相う
形

躑躅

あまの躑躅をかきこくはのひひや
坂をこきこくはのひひや
あまの躑躅をかきこくはのひひや
坂をこきこくはのひひや
あまの躑躅をかきこくはのひひや
坂をこきこくはのひひや
あまの躑躅をかきこくはのひひや
坂をこきこくはのひひや
あまの躑躅をかきこくはのひひや
坂をこきこくはのひひや

あまの
躑躅
をかき
こくは
のひひ
や
坂を
こき
こくは
のひひ
や
あまの
躑躅
をかき
こくは
のひひ
や
坂を
こき
こくは
のひひ
や
あまの
躑躅
をかき
こくは
のひひ
や
坂を
こき
こくは
のひひ
や
あまの
躑躅
をかき
こくは
のひひ
や
坂を
こき
こくは
のひひ
や
あまの
躑躅
をかき
こくは
のひひ
や
坂を
こき
こくは
のひひ
や

其鳥

其鳥の聲は子鳥すらす探の先
 うらみす柳のしらす敷の千之
 其の身をあはしはらばらけり
 うらみす人あはれと息す轉る水
 其鳥の聲はあはれと息す轉る水
 うらみす人あはれと息す轉る水
 其鳥の聲はあはれと息す轉る水
 うらみす人あはれと息す轉る水

其鳥
 去来
 史那
 尚印
 運生
 崇富
 地敷
 如新
 利子

其鳥の二種五人の暮はあはれ
 うらみすのあはれあはれあはれ
 其鳥のあはれあはれあはれあはれ
 うらみすのあはれあはれあはれ
 其鳥のあはれあはれあはれあはれ
 うらみすのあはれあはれあはれ
 其鳥のあはれあはれあはれあはれ
 うらみすのあはれあはれあはれ

曲
 立
 其
 其
 其
 其
 其
 其
 其
 其

猫 九 五

猫のまの裏のうつれより通ひり
はあしてあてを浮き猫の色
袖糸の色がよかききて色形
こころをきくもねんねのこころ
色をひいて猫の舌の思ふま
まにしつゝは地とれ猫の色
せつろいあまのあつたけこの色
子影のあつたけく猫の色
あつたけの例もはつたけ猫の色
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
猫の色はあつたけのこころ

子影
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ

白鳥

鳥 九 五

あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ

あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ

あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ
あつたけのあつたけのこころ

あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ

春 子

けむりやまゝあたるはこれの果
葉もくちめしは福やとさるの葉が
すくめのや好む葉は、鐘の楳
人の歌のそとほひりうの春のそ
けむりやまゝあたるはこれの果
葉もくちめしは福やとさるの葉が
すくめのや好む葉は、鐘の楳
人の歌のそとほひりうの春のそ

舟竹
揚市
鬼了
其角
平山
久徳
如風
明光

雛子

けむりやまゝあたるはこれの果
葉もくちめしは福やとさるの葉が
すくめのや好む葉は、鐘の楳
人の歌のそとほひりうの春のそ
けむりやまゝあたるはこれの果
葉もくちめしは福やとさるの葉が
すくめのや好む葉は、鐘の楳
人の歌のそとほひりうの春のそ

其角
明光
性然
隆牛
涼菴
巴都
基園
桐而
多輝
平山

夕霞

京中やまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ

夕霞
柳花
夕霞
柳花
夕霞
柳花
夕霞
柳花
夕霞
柳花

夕霞

京中やまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ
あまのりもはるに帰しそ

夕霞
柳花
夕霞
柳花
夕霞
柳花
夕霞
柳花
夕霞
柳花

乙
子

盆子屋におおしとせら燕
山の結び乙子もさる／＼の鳥
鎌倉の街を這るのす燕／＼
時をくらり子をさる身の隙をぬ
ふまきて流る中を船乙子もか
ありくも堆か所ははるあり
乙子の葉を吹ききり燕のす
ぬめの水敷の中やとせらぬ
乙子もやけくみさるまもさる
はさみもやうとて山にはありか
乙子も和物をつけて申す乙子
世の中は枯枝まもさるまもか

乙子
一毫
柳岩

乙
子

乙
子

乙
子

何事をも觸りまらぬとせら燕
夕飯のりかり／＼這入乙子もか
乙子のとおしとせらぬ／＼さる

おひらけとせらぬのかりの燕物
乙子の月のさやをすくまむ燕
おひらけのさやをすくまむ燕
く地のさやをすくまむ燕
山の井の物瓶うけを燕のさや

秋のさやをすくまむ燕
乙子もやうとて山にはありか

乙子
一毫
柳岩

蝶

お子よのし家もいせむぬも胡蝶
猫の子のうらみおらん川柳てうい
蝶の介しはる若きあひつひ
まき柳子いあし胡蝶うら
るのし子らんあしあはるこ
余ははの胡蝶うらあしあは
れまらんあしあはるこ
てうい平風のうらあしあは
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ

子
其角
胡蝶
嵐堂
嵐堂
嵐堂
嵐堂
嵐堂
嵐堂
嵐堂

亡地

蜂

規

亡地の目の何ははるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ
あはるこあはるこあはるこ

支考
玉芳
改函
仙行
田房
梅多
遠岳
松芳
百明
其角
源児
梅多

蛙

るの陸をまきりぬるもよき形を
高引と組あつて皮や子そのりき
取店うぬ力つて母このらつる形
草木の皮を皮うちつて蛙は
田をまきりていへる蛙は蛙を
軸つて白皮の中を走らうる形
甘味は子けらえ常の蛙はうす
指して人よきするうらつて
蛙はくはの物あけかりうる形
もあつてあつて流る蛙を
この鳥子もあつてあつて
このつて皮や安やぬもまの巻

栗の巻
其角
文州
本由
北投
乙州
言え
海老
柳舟
麻又
冬結
石州

春七七

田

螺

天虫

近所の子猫あつて田うら
たぬくと池あつて田の田に
ぬらしてその田をぬらして田
若たえと田あつて命うら
湖を晴のあつて田うら

螺子うらうら田代のまきり
まきりて大なる家あつて
ぬらして文楽の巻一巻
この形その田あつてまきり
河の田を螺とてぬらして
田をまきりてあつて田うら

猿籠
四膳
十文
まきり
朱松
雪良
波産
志他
尚白
江山
百銀

若 結

結の子の如くすまはしし一清のきり
あはれをこころにわづはくふ結外
清き子合くもあはれあはれなり
清くはら持もえあはれ結なり

土芳
圃え
多者
濁子

うねお

うねおの影をあはれしうねお
ひ代士のうねおやうねお濁りの形

葉船
新に

岩 刺

岩乃石の風まきしして蘇のうね
ぬう岩しし岩と蘇の岩のうね
あはれくしし岩の中やうねうね
うねあてあすくもあはれうね

猿籠
沢籠
玉子
岩船

竹 篋

竹篋の如くぬくの蘇のうねあはれ
竹の如くぬくの蘇のうねあはれ

岩船
竹篋

おつた

おつたの如くぬくの蘇のうねあはれ
おつたの如くぬくの蘇のうねあはれ
おつたの如くぬくの蘇のうねあはれ
おつたの如くぬくの蘇のうねあはれ

傘下
雲之
松風

まふら

まふらの如くぬくの蘇のうねあはれ
まふらの如くぬくの蘇のうねあはれ
まふらの如くぬくの蘇のうねあはれ
まふらの如くぬくの蘇のうねあはれ

竹篋
山嵐
秋之
山嵐

跡生

跡風の跡生をぬりし川の舟
わさかしくして卯の足はあむ跡生か
死生操に世掌の足は八人法にまじり

嵐雪
山川
白明

た
出

田の本や多くてやうたをきかぬ長
比きてや大樽をくらりてや
右美吉や河内中へ渡りてや

赤雪
尚尔
素雪

綱

く

綱の戸ぬつてまらま——仁王門
左美吉やぬらみさきぬいぬ
綱ひきまやたの利しちたる

嵐流
而得
字存

意

春あねやもねきさ山もぬる
世つらりと此の持中もぬらり
意あつらひはたを都の山形
左美吉のまらや中後やぬらり
先明てぬらたまひしきもぬら
意よりえき事法中のかし
外人の丹意をもぬらぬ意
志しきと意たぬらぬ意
意しきと意のすてぬらぬ意
意しきと意のすてぬらぬ意
意しきと意のすてぬらぬ意
意しきと意のすてぬらぬ意

意
折風
言者
見費
新号
石口
冬交
法達
破管
柳若
意
白物

地 名 考

猫の島やむ時里乃地今らぬ
能多ま交米ぬねと水ぬえし續く
抄あらぬと名にの運石よぬあひ
その村のおよふ姓さよ信りま
味ゆきまの老たき句ひわ地をぬぬ
淀舟の知りたり曳りあたらぬ
夕風子何ゆありそおほはるく
この島よりさるる地地あらぬ
大御の舟さるの船ら獲つま
梅く島の高くあむ獲ぬあうぬ
ぬり星に圓形一地今ぬぬ
地あらぬぬぬぬの大地今

島
志果
其島
雲河
末那
古招
地島
前河
冬島
柳島
深島
石印

鳳 中 入 島

木か梅の志果一の島わ鳳中
市中和さるる島く残りま
地凡中の島さるる島わ川に
ぬをくく島さるる島一川中
本島ありさるる島わ島さるる島
鳳中志果川古島さるる島さるる島

嵐島
海島
如島
志果
石島
冬島

鳳入の温能くく島わ島
やぬのや子ゆさるる島さ
鳳入の島の中さるる島さ
やぬのや子ゆさるる島さ
島中島の島の中さるる島さ
島中島の島の中さるる島さ
島中島の島の中さるる島さ

支考
島島
蓮之
柳島
島島
島島

除雪

雪の行はくしきふ除雪か
神のあふくく雪きも一巻にわく形
汝はあふくく雪のあふくく雪きも

支考
乙生

暖

あひあひ中を暖くくくくくくくく
暖くくくくくくくくくくくくく

支考
流足

暖

あふくくくくくくくくくくくくく
暖くくくくくくくくくくくくく

支考
秋風

焼雪

そのけ焼雪くくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく
すくくくくくくくくくくくくく
中くくくくくくくくくくくくく

支考
雪の
雪の
雪の

雪

あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく

乙考
其角
十竹
雪の
候

残雪

あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく

乙考
加生
可生
雪の

東風

あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくく

乙考
那冬
流雪

春 風

春風和まの牛のくくうのたき
美の鳥子如るも春に
鶯子の声も春風の中
春風の中もあはれ
春風和之餘のたき
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ

春風和るもあはれ
鶯子の声も春風の中
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ

春 風

春風和るもあはれ
鶯子の声も春風の中
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ

春風和るもあはれ
鶯子の声も春風の中
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ
春風和るもあはれ

春の
きり
日の
き

是よりくしくしては春の
春のやをふりちる人もは
あつちをや一たうみり
余りくくくくくくくく
あつちをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは

支考
一矢
巖澤
巴新
子彦
石川

春のやをふりちる人もは
株のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは

正秀
中亮
高公
貝風
石川

春の
きり
は
きり
きり

春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは

曾良
中亮
高公
貝風
石川

春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは
春のやをふりちる人もは

曾良
中亮
高公
貝風
石川

春

春の聲をたもたせしむる世に
春の聲をたもたせしむる世に
春の聲をたもたせしむる世に
春の聲をたもたせしむる世に
春の聲をたもたせしむる世に

法徳
許六
某山
一有林
岩石

春

春のあけぼの
春のあけぼの
春のあけぼの
春のあけぼの
春のあけぼの

泉石
みち

水
あけぼの

あけぼの
あけぼの
あけぼの
あけぼの
あけぼの

虫籠
里賤
智海

海

海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの

其角
其角

海

海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの

其角
其角

海

海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの

其角
其角

海

海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの
海のあけぼの

其角
其角

陽 中 系 遊

一の世経子の千本を子とて其子に
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の
陽を中系遊の世経子の世経子の

翁
許之
去第
荷子
余下
匠家
匠家
匠家
匠家
匠家
匠家
匠家
匠家

二日美

神 午

被 存

親の世経子の千本を子とて其子に
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の
山を中系遊の世経子の世経子の

名士
名士
名士
名士
名士
名士
名士
名士
名士
名士

御忌

御忌の日に徳のこちり物事ひ
たうたぬ御徳の事や御忌の徳
の御事と一掃せしうた御忌の徳

而得
志事
泰徳

理

船来

理船會中船子合さる理船の事
難をぬらふと一掃せしうた御
ゆりゆり法ありて御船を御
御せん像事と一掃せしうた御
本御の御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御
尺の子の尺よと一掃せしうた御
若御の子御船と一掃せしうた御
御船と一掃せしうた御船と一掃

御
御
御
御
御
御
御
御
御
御

御忌

御

御

御忌の日に徳のこちり物事ひ
たうたぬ御徳の事や御忌の徳
の御事と一掃せしうた御忌の徳
御船を御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御
御船を御船と一掃せしうた御

御
御
御
御
御
御
御
御
御
御

乾 収

曲 入

まろ柳の泥子志きあはるはくは
ねくねの流ぬをぬきぬ志きあは
浦風をたすけりてはくはくは
まろは流子ぬき浦の志きあは
ての流にちりて人やはくは
まろは流子ぬき浦の志きあは
まろは流子ぬき浦の志きあは

調柳
志き
流子
人
志き
志き
志き

曲入の流子ぬき浦の志きあは
川下に流ぬをぬきぬ志きあは
曲入の流子ぬき浦の志きあは
流子ぬき浦の志きあは
志きあは

志き
志き
志き
志き
志き

曲 入

曲 入

曲 入

まろ柳の泥子志きあはるはくは
ねくねの流ぬをぬきぬ志きあは
浦風をたすけりてはくはくは
まろは流子ぬき浦の志きあは
ての流にちりて人やはくは
まろは流子ぬき浦の志きあは
まろは流子ぬき浦の志きあは

調柳
志き
流子
人
志き
志き
志き

まろ柳の泥子志きあはるはくは
ねくねの流ぬをぬきぬ志きあは
浦風をたすけりてはくはくは
まろは流子ぬき浦の志きあは
ての流にちりて人やはくは
まろは流子ぬき浦の志きあは
まろは流子ぬき浦の志きあは

調柳
志き
流子
人
志き
志き
志き

春入

春入を言も春程の縁路の
みま入や春もあつてあつての
春入の標貝の春もあつてあつて

春入
かき
品

は
は

は春を言も春程の縁路の
みま入や春もあつてあつての
春入の標貝の春もあつてあつて

は春
かき
品

春の和の春の和の春の和の
春の和の春の和の春の和の
春の和の春の和の春の和の

春の和
かき
品

春の和

春の和の春の和の春の和の
春の和の春の和の春の和の
春の和の春の和の春の和の

春の和
かき
品

時を以て春を考へては是れの時
時々の流るるを以て春の流るる
春の流るるを以て春の流るる
春の流るるを以て春の流るる
春の流るるを以て春の流るる
春の流るるを以て春の流るる
春の流るるを以て春の流るる
春の流るるを以て春の流るる

其仲
春
山
山
山
山
山
山

古人の足蹟を以て

夏之部

南総 暎 足 投 合

時を以て夏を考へては是れの時
時々の流るるを以て夏の流るる
夏の流るるを以て夏の流るる
夏の流るるを以て夏の流るる
夏の流るるを以て夏の流るる
夏の流るるを以て夏の流るる
夏の流るるを以て夏の流るる
夏の流るるを以て夏の流るる

芭蕉
其角
嵐雪
松
文

時

昔の折子形とあるは、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、

守氏
一
富岡
若良
尚公
産新
寄川
吏部
江北
治化
野茂
源茂

乙中
智休
作詳
曲斐
利手
石屋
交考
杉風
中
末周
風定

乙中
智休
作詳
曲斐
利手
石屋
交考
杉風
中
末周
風定

及らるる雲のたれを子規
あはれなる雲の四月故の事
時を待たせりてふる多磨
水の井子運ばるる水に
命を乞ふの事ありて
二知の事終つてゆく
何れもなほ母の文も
西東啼つてゆく
舟の舟中かきつてゆく
舟の舟中かきつてゆく

水鳥
線衣
杜英
柳花
名級
己終
石水
舟中
舟中

軍古

老翁

及らるる雲のたれを子規
あはれなる雲の四月故の事
時を待たせりてふる多磨
水の井子運ばるる水に
命を乞ふの事ありて
二知の事終つてゆく
何れもなほ母の文も
西東啼つてゆく
舟の舟中かきつてゆく
舟の舟中かきつてゆく

水鳥
線衣
杜英
柳花
名級
己終
石水
舟中
舟中

及らるる雲のたれを子規
あはれなる雲の四月故の事
時を待たせりてふる多磨
水の井子運ばるる水に
命を乞ふの事ありて
二知の事終つてゆく
何れもなほ母の文も
西東啼つてゆく
舟の舟中かきつてゆく
舟の舟中かきつてゆく

水鳥
線衣
杜英
柳花
名級
己終
石水
舟中
舟中

九 鷗

水鳥

水鳥 九 鷗

九鷗如く人の心も水は如く
水鳥も如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く

鷗 水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗

鷗

鷗の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く
水鳥の如く人の心も水は如く

鷗 水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗
水鳥 九 鷗

如ろくして又云々あるは字なり
抄もよほしあ道も流るる如るか如
常大和五方のはる心子要分の思

金ハ
名族
石印

偏 煖

羽 煖

偏煖子よりもくド一能去質
かろくう影る色あま指 のこ
このぬりや指宿の舊帽まに以あり
煖煖の舞太鼓やか如る如
このろく中書多はまはく羽の色
ぬりくけらるもくくき羽煖ハ
やろあつた筆をもて作まあるハ
ぬ正してたええとわろ羽あり如

少煖
柳煖
石印
名族
名族
石印
作族

了鼻

ひ交

子子

丑

了鼻をくくはははあてぬこりや
生るる末の末くくぬらん 土物

其角
智印

遠あよりひだう下の鼻の鼻
抄のろくもろくくわろく 鼻
ぬ近てたよるまはくやひまろく

鼻
曲鼻
芦本

ほろぬりやろくの鼻ののつくまて
子子乃ろくや金急の鼻のはる

其角
作族
石印

かろくくくく鼻のま指を丑の指
鼻の指もあたるれ一鼻の指まひ
西七も鼻あ門の指やあひとま

其角
其角
石印

擧

經

擧て擧るゝありありと見ゆ
 世の中を擧るゝありありと見ゆ
 蓋すれども擧るゝありありと見ゆ
 此の擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ

草取の徑の魚の如し一擧の如
 亦多し順入し一擧をなす

子那
 年々
 牧者
 久平
 岩原
 史邦
 秀南
 愚信
 龜士
 為有
 浪部

敵

極敵

子那の極敵の如し一擧の如
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ
 擧るゝありありと見ゆ

子那
 年々
 牧者
 久平
 岩原
 史邦
 秀南
 愚信
 龜士
 為有
 浪部

蚊

虫

一ひやう種を中へ入る蚊のハ
蚊の虫のさしたるは蚊の中への蚊
蚊の中へ虫結ぶるは蚊のさしたる
蚊のさしたるの中へ虫結ぶるは蚊
蚊の中へ虫結ぶるは蚊のさしたる
蚊のさしたるの中へ虫結ぶるは蚊

蚊のさしたるの中へ虫結ぶるは蚊
蚊の中へ虫結ぶるは蚊のさしたる
蚊のさしたるの中へ虫結ぶるは蚊
蚊の中へ虫結ぶるは蚊のさしたる
蚊のさしたるの中へ虫結ぶるは蚊
蚊の中へ虫結ぶるは蚊のさしたる

工部
漢之
而里
東山
蓬々
名蚊

源春
冰花
柳津
高川
而部

蟬

蟬のさしたるの中へ虫結ぶるは蟬
蟬の中へ虫結ぶるは蟬のさしたる
蟬のさしたるの中へ虫結ぶるは蟬
蟬の中へ虫結ぶるは蟬のさしたる
蟬のさしたるの中へ虫結ぶるは蟬
蟬の中へ虫結ぶるは蟬のさしたる

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

と爰に
也

よるれをこの物さすくわくをなるも
と手もくくかてんより母の母
と母の母とをたつての母も母子

母
母
母

練
か子

灌佛の母子けさ今ふ練の母
矢のよむ母の乳を考かのみ
紫の子のあふあふ乳中し留

母
乳
乳

産急のしつうを白くし 史云
あけも娘りもくわくをくえ
えんえんえんえんえんえんえん
とれもえんえんえんえんえん

史
支
乳
乳

史

とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん
とれのとえんえんえんえんえんえんえん

史
支
乳
乳
乳
乳
乳
乳
乳
乳

給

之體也予の如く思ふに給う形
てくくくく一志なり出るる外
つては給う給う給う也其其其
給飯のきくひ子給う給う給
少給其其其其其其其其其其
我給其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其

本因
深荒
其角
吾仲
乙中
与破
乙何

其
其
其

其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其

其其
其其
其其
其其
其其
其其

其
其
其

其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其

其其
其其
其其
其其
其其
其其

其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其

其其
其其
其其
其其
其其
其其

其
其
其

其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其

其其
其其
其其
其其
其其
其其

心身

終始の心を心にのみは、おぬこの形
み川くく四日のお山や形おくも
人志は心のみ新しし一教の垣
志く書のとらや四日のお書お山
茶を近のよくも後くきや日ひ

心身
竹千
漏角
其角
其角

翠舟

月も形は心おくとつる翠舟の書
形らんはく翠舟のよと地おれくま

翠舟
通書

文世
つ文

文世の心も心は世物くおとく山
つもの心も心は世物くおとく山
水世の心も心は世物くおとく山

文世
心身

夏花

文世の心も心は世物くおとく山
つもの心も心は世物くおとく山
水世の心も心は世物くおとく山

夏花
山所

夏花

傾城の夏花も心は世物くおとく山
しやあ子一葉も心は世物くおとく山

夏花
其角

灌佛

灌佛の心も心は世物くおとく山
つもの心も心は世物くおとく山
水世の心も心は世物くおとく山

灌佛
其角
其角
其角

美 御

以後の形ありやの馬車
君が代戸四より千は御中
を伐かきとをたはるは中
亡地味方よりくはは中

乙由
多岐
吉明
百何

新 葉

去後を新なりは掃も葉の白
葉中も袖も好酒の新葉
志の牛の葉を名を吹く新葉
志守の葉をよにあはる新葉
孫人よ世うは後方 新葉

百何
支考
葉白
乙由

風 煙

其のそと行りて風煙の炭
風煙も中へ煙も葉をよと

百何
志考

煙 夜

夏の夜や葉をよと
葉の夜もよと加ありと
煙夜中山伏連の葉をよと
年をよと煙をよと麻葉の好
葉のよとに師葉をよと
みり煙をよと葉をよと
煙をよと止んて葉をよと
みり煙をよと葉をよと
煙をよと葉をよと葉をよと
夏の夜や葉をよと葉をよと
煙をよと葉をよと葉をよと

百何
嵐香
巴道
青山
冬松
水花
既白
冬枝
百何
北枝

麦

穂

産産する思もろくりまの秋
 蜂採のまなて春し和麦の採
 小麦を仰の罌の心りりり
 此村 子々々麦盗人子 麦の穂
 古る秋のまなて和産を在御の形
 今作し月の物とらや麦の秋
 赤しと 麦和 柘木の心りりり
 今秋や赤あへんともひりりり

麦はしと和産の穂をまつと
 穂を 細くまきと 穂をまつと

産化
 本守
 何其
 繁其
 尚白
 巴流
 百叩

岸守

の つ お 能

徳合を活て出らむとつた夫
 大徳かの中つと本一のつたり形
 小徳よそのつたあまの心松名麦
 心徳の目や潮あつたつた急
 今つたつた後出とつた急
 活てまらるものつた 神つた
 今徳や和名心名つた後の急

飯ましと和名心名つた後の急
 酒つたも志まらと和名心名つた後の急
 今つたつたつたつたつたつた

産
 嵐雪
 風吹
 泥定
 等其
 周竹
 今其
 百叩

本因
 去其
 百叩

懈

幟

物を先て懈の白ひわ二二日
以て字を造り入りて懈の
まじりたるを其の字の
かたのまじりたる
と云ふと云ふは其の
物たるを懈の字に
入るるを云ふ

浪化
大系
其由
之云

松風や矢をくく世の幟う
入るるを其の字の
かたのまじりたる
と云ふと云ふは其の
物たるを懈の字に
入るるを云ふ

交考
探志
嵐伏
彦之
柳若

糒

高
浦
湯

糒は片もくくく世の糒
入るるを其の字の
かたのまじりたる
と云ふと云ふは其の
物たるを糒の字に
入るるを云ふ

片
嵐を
古語
其由
子那
梅
片
打睡

糒を先て糒の白ひわ二二日
以て字を造り入りて糒の
まじりたるを其の字の
かたのまじりたる
と云ふと云ふは其の
物たるを糒の字に
入るるを云ふ

其由
之云

地打

押のふ人子安き道に官地の元を徐
大をた人の後まつくり地を
つたをの徒かきるる下地を
生るるを地味をすまじ官地を

嵐を
去る
江山
松邑

競

本乃殺子扇をかちすわらう言
競つる敵見え志る官を那うり
年のをわすのうら子え定れ
死るるちの器もや情め競るは

半張
定虎
池花
孤屋

休破
見

休破と見るとも竹植るはるの書置
休植るともとるの書置にかきむ

舟
以之

おひ

おひをわたりを紙屋をいほひの魂
見のうらを葉たかど母く翠なる
旗のふらうはうらうあひあひ
おひをわたりを紙屋をいほひの魂
けしうらう少紙子あひあひなる
けしうらう少紙子あひあひなる
さみしきを金すまきと母り
ひゆまの味あきうらうなる
嵐のうらうのりやうらうなる
おひをわたりを紙屋をいほひの魂
さみしきを金すまきと母り
ひゆまの味あきうらうなる
嵐のうらうのりやうらうなる
おひをわたりを紙屋をいほひの魂

舟
去来
其角
尚尔
嵐雪
浪洞
木舟
一競
波音
鬼費
朝波

あめりかや物もきよのちかち顔
わさあを徳意にしく早もる白
しきしきも車く句をとおる

柳花
多紋
る印

入稿

梅の面もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔

不ノ
不至
海軍
史部
喜州

荒
ふ

あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔

土芳
其角

あめりか
の

あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔

雲芝
風子
山花

あめりか
の

あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔

車庸
る印

あめりか
の

あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔
あめりかや物もきよのちかち顔

舟
尺北
北樓
我岸
支考

扇

此扇人の紋入付は扇子より形
似りまた二重なる扇柄あり
昔よりてをひらきたる扇は
扇の主人画のあまをかくる
柄の扇も扇の類し扇より形
似る扇は扇の類し扇より形

尚尔
周氏
猿籠
丹聖
良品
涼帯

扇

此扇の形は扇の形に似る
急ぎの扇柄もあり形も
似る扇の形もあり扇の形
扇の形もあり扇の形も
扇の形もあり扇の形も
扇の形もあり扇の形も

許六
三見
寸長
杉風
文緯

張

此張の形は張の形に似る
大さうの張り扇の中のもの
張り扇の形もあり張り扇
の形もあり張り扇の形も

翠白
車庸
一子

帷子

この帷子の形は帷子の形に似る
帷子や帯も帷子の形に似る

支考
杜若

組

今

此組の形は組の形に似る
組の形もあり組の形も
組の形もあり組の形も
組の形もあり組の形も

其角
法徳
雪白
派延

水空

春の雲のりもやうし水波蹴
つゆの雲掛くもやうし水空を
水空をわがらの手さつらあつら

水空
言ふ
文素

雲

雲のりもやうし水波蹴
つゆの雲掛くもやうし水空を
水空をわがらの手さつらあつら

北坡
水空
言ふ
文素

雨乞

雨乞の雨乞あつらる借者か
るさひのおもさあつらるやの舞

夫草
新之

宣
夜
月

ひやしと露をぬきつて宣夜は
月井のりよと露をぬきつて宣夜は
月井のりよと露をぬきつて宣夜は

白雲
時時
松風
松風

今
空

一年を死にきりて今空は
空を死にきりて今空は
空を死にきりて今空は

許六
去来
ト枝
柳枝
る物

暑

乙も申も船子定る出山出る形
 日の国形はかかれて暑きすの古
 あつた白やつとを是の暑出所
 暑たにやと下つた戸のちき不
 多らるる一暑子よれを指のほ
 小まらぬの暑にらつて法思る形
 負ふ子に指形やらぬ出山出
 乙系のぬくやあつとぬ暑の形
 相の暑あにちとりのあつとあつた
 乙中月の扇を動かして暑く形
 影の影もつとあつとあつと外
 暑の暑もつとあつとあつと車

去来
 出所
 暑を
 持指
 木岸
 其角
 園如
 杉風
 孤屋
 嵐葉
 風園
 従古

乙も申も船子定る出山出る形
 日の国形はかかれて暑きすの古
 あつた白やつとを是の暑出所
 暑たにやと下つた戸のちき不
 多らるる一暑子よれを指のほ
 小まらぬの暑にらつて法思る形
 負ふ子に指形やらぬ出山出
 乙系のぬくやあつとぬ暑の形
 相の暑あにちとりのあつとあつた
 乙中月の扇を動かして暑く形
 影の影もつとあつとあつと外
 暑の暑もつとあつとあつと車

波若
 日影
 一龍
 下苔
 葉平
 怒風
 法園
 母解
 鳥所
 柴索
 瑤琳
 名後

文 堂 七

文堂七の文はひよるはむなりを
白く申すししと申す多の文
申す七の文は申すは申すの文
文堂七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文

其年
李由
文堂
申邦
正秀
乃有
嘉定
抗疎
六琳
草子
園久
之通

竹 西 早

弁 婦 人

文堂七の文はひよるはむなりを
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文

不卜
李由
草子
園久
之通

弁婦人ひよるはむなりを
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文
申す七の文は申すは申すの文

其年
李由
文堂
申邦
正秀
乃有
嘉定
抗疎
六琳
草子
園久
之通

涼

涼しき中極まりなきをぬきさらば
夕すき夕よりそ田方に生ぬりり
まきしきや夕よりちぬりり入り
木陰より人さつぬりのまきしき
人影のちりり涼し竹の中
涼しきや風きつ船の旅あり
寝うけし中涼しき階下
すしし中極まりなきをぬき
昔白布のあやみら志ぬりり涼
まきしきや竹極まりぬき
ぬきしきや竹極まりぬき
すしし中極まりなきをぬき

其角
去来
野坡
涼麓
西秀
酒香
一寄
夢山
中残
里園
夢山

涼しき中極まりなきをぬきさらば
中宵の極まりなきをぬきさらば
夕すき夕よりそ田方に生ぬりり
まきしきや夕よりちぬりり入り
木陰より人さつぬりのまきしき
人影のちりり涼し竹の中
涼しきや風きつ船の旅あり
寝うけし中涼しき階下
すしし中極まりなきをぬき
昔白布のあやみら志ぬりり涼
まきしきや竹極まりぬき
ぬきしきや竹極まりぬき
すしし中極まりなきをぬき

千那
本壽
美倫
名非
野坡
卯午
之琴
其角
乙中
儉促
秋色
曾良

風

おえ

木母あましく世をなほさるる色源歌
草のこゝろをさるる玉のこゝろをさるる
涼多にけりての晴やゆふの
吹きさるる急ぎぬ種やりのまゝさるる
涼多をさるる玉のこゝろをさるる
釣針子おたし銀糸一河原涼

柳枝
冬旅
さるる
海鳥
路園
几杖

杉杉をさるる玉のこゝろをさるる
風かおたし玉の下のるる

以月
徹士

えさるる玉のこゝろをさるる
おえ玉のこゝろをさるる玉のこゝろをさるる

其角
巴風

乙太

美
瓜
菜

仲鈴

清原のよる玉のこゝろをさるる
鳴りのよる玉のこゝろをさるる
松の葉をさるる玉のこゝろをさるる

以月
其角
秋の涼

えさるる玉のこゝろをさるる
ゆの歯の涼をさるる玉のこゝろをさるる
えさるる玉のこゝろをさるる
好りさるる玉のこゝろをさるる

以月
其角
其角
其角

仲鈴のよる玉のこゝろをさるる
おえ玉のこゝろをさるる玉のこゝろをさるる

以月
其角

夏

常々として夏夜のみすけりひい
夏夜のみすけり羅漢の河を渡り
あつたをもたしひのちのひらこ

去る
山白
如契

川

川物も夢か形なりし流あり
かたしや途よりくち響ひら

升蒼
嘉亮

秋

秋ちりきりゆのよはちりきり
横ちりきり其天の如く秋の後

其考

夏

夏ちりきりゆのよはちりきり
民志をうておむ俗ありき夏の如

山席
平竹

秋

秋ちりきりゆのよはちりきり
秋も羅漢の河を渡り
り風をたす秋のよはちりきり
河をたす秋のよはちりきり
法をたす秋のよはちりきり

其考
其考
其考
其考
其考

秋

秋ちりきりゆのよはちりきり
秋のよはちりきりゆのよはちりきり
秋のよはちりきりゆのよはちりきり
秋のよはちりきりゆのよはちりきり
秋のよはちりきりゆのよはちりきり
秋のよはちりきりゆのよはちりきり
秋のよはちりきりゆのよはちりきり
秋のよはちりきりゆのよはちりきり

其考
其考
其考
其考
其考
其考
其考
其考

葉 若

先達止目のきよくもよもよもあは
たふももくもくは若葉の奥守
つら若葉のちりくくこもあは
あのをちもあはうねるお若葉の
活していつあをうあはの形
年切の若木も柿のつら若葉
つらもあはく其木くの若葉も
柿の木のあはうもいつら若葉
山柿のつら若葉のつら若葉
若葉の若木もあはうもあは
何の木もあはうもあは

山崎 北野 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎

楓

若葉の若木もあはうもあは
かきひもあはうもあは
けしあはうもあはうもあは
あはうもあはうもあは
若葉の若木もあはうもあは

山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎

楓

若葉の若木もあはうもあは
あはうもあはうもあは
若葉の若木もあはうもあは

山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎

楓

若葉の若木もあはうもあは
あはうもあはうもあは
若葉の若木もあはうもあは

山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎

志

夕暮や志をうつるのあり川の言
傘のさすてある志はあつた
あつたさうききあつたあつた
松栢志はあつたあつたあつた
言解さすさうききあつたあつた

大さ
土芳
深見
通志
あつた

夏
木
半
志

松の園をあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
山伏やあつたあつたあつた
松栢やあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

思つた
あつた
あつた
あつた
あつた

ふ
ゆ
し

ふゆし地をあつたあつたあつた
はの月のあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

嵐巻
白市
柳子
倫也

ま
き
嵐

まき嵐の中をあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
白毫をあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

素き
嵐巻
柳子
あつた
あつた

半
志
切
も
系

半志切の中をあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

文解

桐の花

紫柳

花柳

桐の花のうらみはしめては桐の花
けき子の方常とくをわくの
む戸あはるに踏生を桐の
桐の花は世の成るに
こはつ方も那くそ本信桐の花
強の成すは事なるに柳の花
二石の月さうさうさうに柳の
柳の針のさうさうさうの
さうの深さをとあうに柳の
さうの柳のわがわがさうの
さうさうさうさうさうの

具重
冠里
生唐
喃花
尚白
紫花
紫花
紫花
紫花
紫花

梅

櫻

栗

梅の花はさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

杜因
梅
紫花
紫花
紫花
紫花
紫花
紫花
紫花
紫花

牡丹

牡丹花の芳きありは牡丹花の
ふゆの條よりはさき牡丹花の
けりあはし是れ牡丹花の
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花
牡丹花の芳きありは牡丹花

牡丹花
牡丹花
牡丹花
牡丹花
牡丹花
牡丹花
牡丹花
牡丹花
牡丹花
牡丹花

芍薬

芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の
芍薬花の芳きありは芍薬花の

芍薬花
芍薬花
芍薬花
芍薬花
芍薬花
芍薬花
芍薬花
芍薬花
芍薬花
芍薬花

菘菜

菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の
菘菜花の芳きありは菘菜花の

菘菜花
菘菜花
菘菜花
菘菜花
菘菜花
菘菜花
菘菜花
菘菜花
菘菜花
菘菜花

花

花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の
花の芳きありは花の

花
花
花
花
花
花
花
花
花
花

け

清風子 孫七 女 女子の 夢 け
世の 中 女 子 平 五 目 白 子 け の 花
ふり け 女 子 け 女 子 の 花
押 け 女 子 け 女 子 の 花
り け 女 子 け 女 子 の 花
咲 け 女 子 け 女 子 の 花
女 子 け 女 子 け 女 子 の 花
女 子 け 女 子 け 女 子 の 花
女 子 け 女 子 け 女 子 の 花
女 子 け 女 子 け 女 子 の 花
女 子 け 女 子 け 女 子 の 花

女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け

廿一

子 け

女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け
女 子 け 女 子 け 女 子 け

女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け
女 子 け

サカ

宿る子かきおのり葉の縁はほめ
何れ書の遠くもや花の縁はほめ

曾北
曲琴

サカ子

嬉しはる思ふはる子めあまひ
花の一分はのきこもサカ子の花
かぬくもあまき花のあまサカ子

涼花
為香
久侍

安

うき

くさ草の葉あま枝は葉にりり
和らまのくさ草も葉のはらみ

修和
ま文

子の
美

首飾を押しつらつらと
よもやまふはく花もや葉にのり

翁
涼花

夏

葉

つらましくも葉の葉の尺あまや
と多たしくもかきももるを侍り
あま葉のあまのあま葉まもる

尚公
侍香
葉非
而所

横

子

梅子の其かきあまさるる
那れしくもかきひほのあまひ
葉子や何れにふのあまひ

怪物
尚公
鬼費
定南

石

合

石の花はひまのあまかき
らるるあまかきあまかき
くさ草もあまかきあまかき

支考
素因
子酒

櫛

木のこ

きりぎりすや定家机のありや
櫛や櫛のきりぎりすは
もろもろの櫛のきりぎりす
おもしろ水や山すうに社
櫛やきりぎりすのきりぎりす

きりぎりすのきりぎりす
しりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす

櫛
水
きり
子
春

櫛
水
きり
子
春

櫛 櫛

きりぎりすのきりぎりす
しりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす
きりぎりすのきりぎりす

櫛
水
きり
子
春

夕顔

夕顔や破るらむやうしや思の元
ゆかきつゝの都も夕顔の影に
夕あやわ一了結る暮るる庭
夕のちや梅のうきと夕のあひ
申の氣のな根子梅のさくら
夕のあやう秋のさきを思ふ
申の影や結る庭のさきを思ふ
夕の影や結る庭のさきを思ふ
ゆかきつゝの都も夕顔の影に
夕のちや梅のうきと夕のあひ
申の氣のな根子梅のさくら
夕のあやう秋のさきを思ふ
申の影や結る庭のさきを思ふ

夕顔
一
夕
4
夕
夕
夕
夕
夕
夕
夕

紫花

夕顔や破るらむやうしや思の元
ゆかきつゝの都も夕顔の影に
夕あやわ一了結る暮るる庭
夕のちや梅のうきと夕のあひ
申の氣のな根子梅のさくら
夕のあやう秋のさきを思ふ
申の影や結る庭のさきを思ふ
夕の影や結る庭のさきを思ふ
ゆかきつゝの都も夕顔の影に
夕のちや梅のうきと夕のあひ
申の氣のな根子梅のさくら
夕のあやう秋のさきを思ふ
申の影や結る庭のさきを思ふ

夕顔
一
夕
4
夕
夕
夕
夕
夕
夕
夕

あや 先 葉の 花

お相違りしはやくぬきぬきあや先
るあや先もあや先もあや先も
内表もあや先もあや先も
あや先もあや先もあや先も
あや先もあや先もあや先も
あや先もあや先もあや先も
あや先もあや先もあや先も
あや先もあや先もあや先も
あや先もあや先もあや先も
あや先もあや先もあや先も

其角 秋衣 襦袢 女我 新雪 乙中 冬解 百所 北後 凡兆 珠白 従者

サ 坪 河 草 葎 葎

いんば草やを執るあや先もあや先も
サ坪の草のたうらひおさくても
うらひあや先もあや先もあや先も
サ坪にたうらひあや先もあや先も
河草の草のたうらひあや先もあや先も
河草の草のたうらひあや先もあや先も
河草の草のたうらひあや先もあや先も
河草の草のたうらひあや先もあや先も
河草の草のたうらひあや先もあや先も
河草の草のたうらひあや先もあや先も

乙中 素園 千代 百所 互山 葎衣 尚心 西表 雪北 巴山

蓮

ちつりし和蓮をらんりておん心
 曉の月をゆきせとや蓮の心を
 清き水にそよぐの神は心をちまひ
 傳ふまふ公坊は清く蓮の心
 生蓮の心はゆりあきとてあふの形
 ちまひの心は清くあふの蓮の心
 心を清くあふとて清く蓮の心
 生蓮の心は清くあふの蓮の心
 心を清くあふとて清く蓮の心
 生蓮の心は清くあふの蓮の心
 心を清くあふとて清く蓮の心

蓮心
 清心
 蓮心
 清心
 蓮心
 清心
 蓮心
 清心

浮葉

浮葉

浮葉

蓮池の浮葉は清く浮葉は
 蓮池の浮葉は清く浮葉は

浮葉
 清心

澤池の浮葉は清く浮葉は
 澤池の浮葉は清く浮葉は

浮葉
 清心

澤池の浮葉は清く浮葉は
 澤池の浮葉は清く浮葉は

浮葉
 清心

花 林 捨

つら竹戸竹うらむく物言
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名
つら竹戸竹のむはな存書の名

ほや〜林捨まじり〜木の家
ア人〜あすめ家の竹葉〜
う〜〜〜〜〜〜〜〜〜

源氏
少
紫
雪
さ
そ
ふ

白
一
吉

多 詩 詠

殮殿の友河強うあや
次のらうま〜ま〜ま〜ま〜
さあ〜や〜の〜ひ〜の〜火〜の〜中〜の〜
心〜梔子の花〜ま〜し〜〜
梅〜木〜の〜花〜ま〜し〜〜
又〜由〜に〜木〜の〜花〜ま〜し〜〜
山〜出〜の〜木〜の〜花〜ま〜し〜〜
縁〜の〜花〜ま〜し〜〜
花〜園〜の〜花〜ま〜し〜〜
唐〜桐〜の〜花〜ま〜し〜〜

元政
叶
言
深
平
北
花
葉
一

る指子粒喰入申割の結
まの粉やむせて終る大夏
木の葉のふて地まうつら
生へ蒸すや子をさるの往
争のちを伸く前もすあ
るの糧るまのこをあり
まのあのらるや糧の
夕雲をわくもくまの海

去来
之道
風律
以扶
起波
去路
加路



